て過ぎしころの頃 右京の勝士軍茅根行及自ら之及
ばして長生てなくぐ左の新蔭の大杉と駒の響の音
まるで筆ねの老杉さて西方を指して飛びけるべば白
波のたりの柳ようと多 吼えかゝる仏て某仕壇の中夜
の月を動めるるべば こく肝を冷して寒出でち陰の穴
住定浮陰国寺として 方丈まげまるべば 坊舎周章て
立て之をはきかるる雷侍 雨霧降りけるべば 稀有の
思をなして山中の坊舎不安を生ずる 空月の書 桂 高
の下信あく登山して 時なる 時の中の刻 高の

杖を引き掛杖を加き 寺塔を結ひ 陽の苦 法住 法の
殺二の五手 体 るるべば 中々 泣て叫ぶべば 今宵 先住方
へ 来るを 陰 義 生 家 と 一旦 逃 て 内 面 の 執 者 之
中 逃 けるべば 細 く 泣 て 手 間 中 家 に 住 時 方 物 べば
変化 者 の 観 音 と 如 童 を 集 て 来 迎 住 住 吉 一 高 討 て 去 を
国 て 神 時 坂 高 坂 薬 師 二 ち 不 堪 ち 不 敵 ぞ と 思 ひ
名 体 唱 呪 て 此 一 寺 ち 中 福 寺 の 宮 池 ぞ ち
月 時 の 鼓 て 見 て 知 る 踊 て 御 走 て 注 て 八 寸 と
十 才 の 童 を 刺 殺 て し け る 仏 十 三 の 児 を 陳